

ノート

兵庫県東播磨地域におけるウチムラサキの生息状況

小林孝司^{a*}・榎本陽子^b・藤 克浩^a

Habitat conditions of purpulissh washington-clam in Hyogo Prefecture, off Higashiharima, Seto Inland Sea

Koji KOBAYASHI^{a*}, Yoko ENOMOTO^b AND Katsuhiro FUJI^a

キーワード：ウチムラサキ，生息状況，兵庫県

兵庫県東播磨沿岸海域は、かつては兵庫県内のウチムラサキの主漁場であったが、現在はそれを目的とする漁業もなく、生息さえ危ぶまれる状態となっている。

この海域のウチムラサキ資源を増殖させるため、兵庫県東播磨県民局では、漁業者や研究者と共同で「ウチムラサキ再生事業」を2005年から開始した。事業の実施にあたり、ウチムラサキが多く漁獲されていた時期から現在に至る生息状況を把握するため、漁業者への聞き取り調査を実施した。

本報では、この聞き取り調査と漁獲統計資料から推定したウチムラサキの生息状況について報告するとともに、減少要因について考察した。

調査方法

ウチムラサキの生息時期、生息場所、漁法等について、東播磨底曳網漁業協議会員22名、明石浦漁業協同組合役員14名、林崎漁業協同組合たこつぼ漁業者3名、江井ヶ島漁業協同組合役員6名、魚住漁業協同組合長、東二見漁業協同組合長、西二見漁業協同組合長、播磨町漁業協同組合長から聞き取りを実施した。

漁獲統計は、兵庫県農林水産統計年報（近畿農政局

神戸統計・情報センター 1960 - 1992）の「その他貝類」漁獲量および、原田（1995）ならびに明石市農林水産課が収集したウチムラサキ漁獲量を使用した。明石市の漁獲量は1983年以降の記録のみ入手できた。漁業経営体数は兵庫県農林水産統計年報を使用した。

結果および考察

ウチムラサキの生息範囲 聞き取り調査によるウチムラサキの推定生息範囲を第1図に示した。聞き取り調査から、東播磨地域のウチムラサキは、かつて明石市林から加古川市別府町にかけての沿岸の水深10 m以浅の海域に主に生息していたことがわかる。このうち、好漁場であった明石市林、明石市江井島、明石市魚住町から加古郡播磨町にかけての沿岸には高密度に分布していたと推測された。

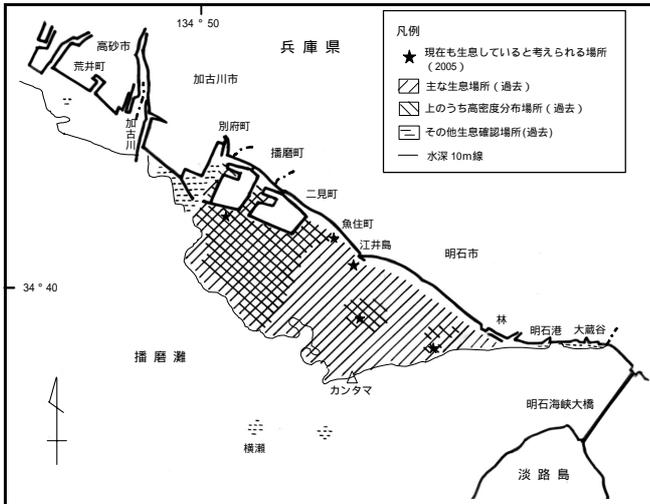
また、その範囲は広くないが、明石市大蔵谷、明石港周辺、加古川市別府町から加古川河口にかけての海域および高砂市荒井の沿岸、横瀬周辺海域でもウチムラサキが生息していたようである。

さらに、これら沿岸域の一部では、たこつぼ漁などの漁業者が、ウチムラサキを捕食中のタコを確認していることから、現在もウチムラサキが生息していると

*Tel:0794-21-9162. Fax: 0794-21-4056. Email: Kouji_Kobayashi@pref.hyogo.jp

兵庫県東播磨県民局地域振興部加古川農林水産振興事務所（675-8566 兵庫県加古川市加古川町寺家町天神木97-1）

^a現所属：兵庫県農林水産部農林水産局水産課（650-8567 兵庫県神戸市中央区下山路5-10-1）^b現所属：兵庫県立農林水産技術総合センター水産技術センター（674-0093 兵庫県明石市二見町南二見22-2）



第1図 東播磨地域ウチムラサキ生息確認場所等位置図。

考えられる。

主な生息場所であった明石市林から加古川市別府町にかけての海域は、明石海峡の影響で潮流が最強時1.2knから4.8knと速く、底質は砂、砂礫、貝殻混じりの砂などである。この生息範囲の東側および沖側の端は、水深10mの等深線に沿っている。

一方生息密度が低かったのは、加古川市別府町の約3.5km西に流れ込む1級河川の「加古川」河口域、およびその西側にあたる高砂市沖である。高砂市沖の海域環境は「加古川」以東と大きく異なり、最強時潮流は0.7knから0.9kn、底質は主に泥であり、「加古川」以東よりは狭いが、沿岸には水深10m以浅の海域が続いている。

「加古川」河口域の生息密度が低いのは、河川水の流入による低塩分の影響を受けるためと考えられ、これは「ウチムラサキは淡水を嫌う」という聞き取り結果と符合する。

以上のことから、潮流が速く、底質が砂・砂礫の水深10m以浅で、流入河川の影響を受けない海域が、ウチムラサキの生息に適していると考えられる。漁業の実態 ウチムラサキは深く潜砂するため、一般に潜水器漁業または船上からのほこ突きで漁獲される。兵庫県東播磨地域では、もっぱら船上からのほこ

突きにより漁獲されていた。ほこ突きとは、漁具の先端に付けたモリを海底中の貝に挟ませ、モリをくわえた状態の貝を船上に引き上げて漁獲する方法である。また、この漁法は漁場の水深に合わせて、2種類の方法で行われており、水深の浅い漁場では箱メガネで海底表面に出ている水管を確認し、竹棒の先にモリを付けた漁具でその水管を突いて漁獲していた。一方、水深の深い漁場では、ロープにモリとおもりを取り付けた漁具を海底まで沈め、これを貝が挟むまで手で上下を繰り返して漁獲していた。

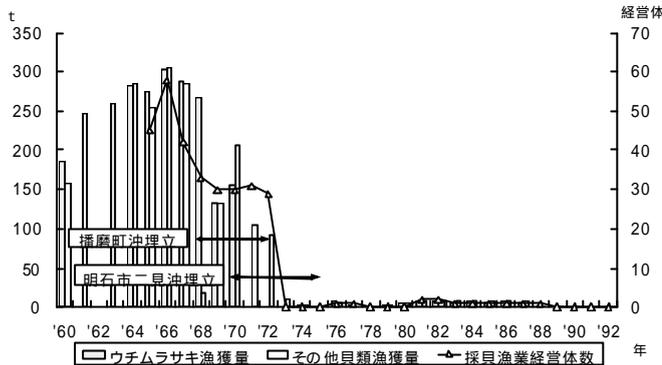
また、ウチムラサキは、明石市東部から加古川市東部にかけての沿岸に広く分布していたが、漁業資源としての利用実態は分布域の東西で異なっていた。

分布域の西側の二見、播磨地区では出荷を目的としてウチムラサキを積極的に漁獲していたが、明石市江井島以東では主に自家消費用または一本釣りの餌料用としての漁獲に止まっていた。このため、漁獲統計ではこの地区の記録は確認できない。このように分布域の東西で漁業実態が異なるのは、明石市魚住町以西の沿岸海域は水深が浅く、漁場利用の面から有利であったことが大きな要因と推察される。

漁獲動向 播磨地区では1960年から1968年までの間は年約200tから300tのウチムラサキが漁獲されていたが、1969、1970年には年約150tに減少した。その後、漁獲量はさらに急減し、1974年には殆ど漁獲されなくなった(第2図)。

これは、1968年から1975年にかけて加古郡播磨町沖、明石市二見町沖で順次行われた海面の埋め立てによる漁場の喪失が原因と考えられる。このことは、聞き取り調査でも漁業者によって指摘されている。また、漁獲量の急減に符号するように、1967年までは40を上回っていた採貝漁業の経営体数が1968年以降は30前後に減少し、さらに1972年に29あった経営体が翌年には全て転廃業している。

二見地区でも播磨地区の場合と同様に、1960年から1967年の間は年400t前後のウチムラサキが漁獲さ

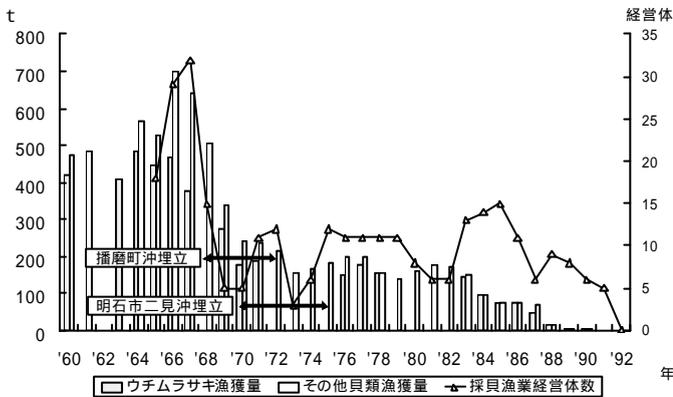


第2図 播磨地区のウチムラサキ、その他貝類漁獲量及び採貝漁業（主とする）経営体数の推移。

1967年に32あった採貝漁業経営体はその後2年間で5経営体にまで減少した。その後は多少の増減を繰り返しながらも10前後の経営体数が維持されていたが、1989年から再び減少し始め、漁獲がなくなった1991年の翌年の1992年には採貝漁業経営体も全て転廃業している。

隣接する播磨地区と二見地区の漁獲量の推移が異なるのは、播磨地区では主に箱めがねを用いた見突き漁法により、水深の浅いごく沿岸で操業していたため、海面埋め立てにより漁場を殆ど失ったのに対し、二見地区では、埋め立て地の沖合で、ロープを使ったほこ突き漁法により漁業操業を継続したため、一定の漁獲量が維持されたことが原因と考えられる。

魚住地区でも二見地区の10分の1以下の量ではあるが、ウチムラサキが漁獲されていた(第4図)。二見地区の漁獲量の推移と類似していることから、魚住沿岸海域のウチムラサキの生息数は隣接する二見沿岸海域と同様に推移したと推察される。



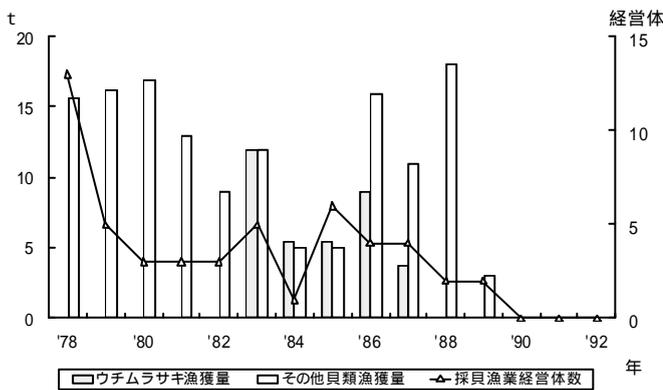
第3図 二見地区のウチムラサキ、その他貝類漁獲量及び採貝漁業（主とする）経営体数の推移。

漁獲の記録がない明石市江井ヶ島以東の沿岸海域については、ウチムラサキの生息状況の動向を推察することは困難であるが、1985年には潜水調査で最高36/m²の密度の生息が確認されている(林崎漁業協同組合青年部1987)こと、またこの地区でも阪神淡路大震災(1995年)前頃まではウチムラサキを漁獲することができたという聞き取りがあることなどから、当該海域のウチムラサキの生息数も魚住町以西の海域と同様の推移をたどっていった可能性が高いと思われる。

以上のようにウチムラサキの生息数は2段階の経過をたどって減少したと考えられる。

第1段階は統計資料や聞き取り調査結果の検討から、海面埋め立てによる生息海域の減少が原因であることはほぼ間違いない。

第2段階の原因は明らかではないが、第3図に示すように、採貝漁業経営体数の減少が漁獲量の減少を後追いしていることから、この漁獲量の減少はウチムラサキの生息数の減少によるのもので、1991年にはほ



第4図 魚住地区のウチムラサキ、その他貝類漁獲量及び採貝漁業（営んだ）経営体数の推移。

れていたが、海面の埋め立てと符合するように1968年から1973年までの間に150t前後まで急減した。その後1983年までの10年間は同水準の漁獲量で推移したが、1984年から再び漁獲量は減少し始め、1991年以降は全く漁獲されなくなった(第3図)。これに伴い、

こ突き漁業経営が維持できない水準まで生息密度が低下したと推察される。しかし漁獲統計には表れないが、阪神淡路大震災(1995年)前頃まではウチムラサキを漁獲することができたという聞き取りがあることから、この頃までは生息密度の高い場所がまだ残っていた可能性もある。また、原田らの漁協聞き取りおよびアンケート調査(1996年)で、加古川市から明石市の地先および沖合海域で、ごくわずかな数のウチムラサキの生息情報があることから、1991年以降も極めて低い水準ではあるが生息していたと推察される。

今後ウチムラサキ資源を回復させるためには、埋め立てによって生息場所が喪失し、1960年代後半以降ウチムラサキの漁獲量が大きく減少した後、しばらく安定していた漁獲量が再び減少した原因を明らかにすることが重要であろう。

謝 辞

ウチムラサキの生息状況の聞き取り調査にご協力頂

きました漁業協同組合役職員および組合員の皆様、ならびに漁獲統計資料収集にご協力頂きました明石市産業振興部農水産課の皆様にご心から感謝します。

文 献

- 原田和弘(1995) 日本沿岸におけるウチムラサキガいの分布(アンケート調査による) 兵庫水試研報, 32, 55-59.
- 原田和弘・山本 強・岡本繁好(2001) 兵庫県内におけるウチムラサキガいの分布状況とその漁法. 兵庫水試研報, 36, 55-57.
- 林崎漁業協同組合青年部(1987) ウチムラサキ資源の保護育成調査. 昭和60年度漁村研究実践活動報告集, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 139-155.
- 近畿農政局神戸統計・情報センター(1960-1992) 「兵庫県農林水産統計年報」, 兵庫農林水産統計協会, 神戸.